

# 木魂をめぐる祭儀と信仰 —高知県、物部村の場合—

松尾恒一

Rituals and Beliefs Surrounding Tree Spirits — the Case of Monobe Village, Kochi Prefecture —

- ① 伐木と木魂送り
- ② 山の神の祭儀
- ③ 古社、木を伐る神靈
- ④ 柚法——柚の呪法——
- ⑤ 戰後における民俗的慣行の衰退

## 【論文要旨】

本稿は、職能者の技術と呪術の考究を目的として、高知県東部の物部村における柚職を中心とする事例として論じるものである。

柚とは伐木に従事する職能者であるが、その職とともに多くの民俗的な慣行は木に宿るとされる木魂や、山の神やその眷属に対する信仰に基づくものが多い。伐木の際に木魂を奥山の山の神のもとへ送り返す「木魂送り」の法や、神木を切った際に切り株を鎮める「株木鎮め」の法がこれで、これら柚によって実践された呪的な作法は「柚法」と呼ばれた。これらの作法は、職の道具である手鋸等を祭具として行われた点に特色を認めることができるが、特に形状・形態に特殊条件を備えた道具が呪術的な力を發揮するものと信仰された。

当村は、「いざなぎ流」と呼ばれる民間宗教が伝承される地域としても知られるが、本宗教に取り込まれた柚法があった。本来柚職によって行われていた柚法を核として、

さらに呪術的な性格の強い式法として実践された。

柚法などの民俗的慣行は、斧と鋸で作業を行っていた昭和三十年代まで行われていたものであるが、チエーンソーや集材機などの機械の導入や、営林署・労働組合の利益追求のための皆伐・密植など林業の大変革の中で急速に衰退していった。

なお筆者はすでに、当地域における職能者の木魂の信仰について、大工の建築儀礼を中心に論じた「物部村の職人と建築儀礼」を公にしており、本稿はこの続考となるものもある。